SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

自然、不自然、セアラ・フィールディング

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2019-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026760

自然、不自然、セアラ・フィールディング

鈴　木　実　佳

1）はじめに

セアラ・フィールディング（Sarah Fielding, 1710-68）の作品は、読み物としての完成度が高くて、読み進むのが楽しいというわけには残念ながらいかない[1]。兄のヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707-54）や、兄のライバルであり、彼女の相談相手でもあったサミュエル・リチャードソン（Samuel Richardson, 1689-1761）といった同時代の大物が近くに控えているので、余計にそう感じられるのだろう。一方で、そのようにストーリーテラーとしての完成度が高くないにもかかわらず、別の魅力があり、研究対象としてはたいへん面白い作家である[2]。彼女は、自分にとって、そして読者にとって、未知の部分に足を踏み出そうとしていて、常に新たな課題を自分に課し、挑戦を試みているように思われ、その気概が頼もしいのである。そして追い求めているものに一貫性がある。彼女は、物書き（彼女にとって「詩人」）が何をどのような手法で書き表すべきであるか、自分に問い、答えをだそうと試みるのだ。

彼女の作品の特徴のひとつに、話の聴き手、作品の読者を作品に登場させるということがある。本の読まれ方に注意を払っているということを宣言するばかりでなくて、彼女は読者の反応を作品に描きこむことを行い、推奨読者の態度、反面教師役の読者の態度を自分の作品の読み手に提示するのである。自信満々で物語を滔々と語り進めるのではなく、話の受け手を意識し、気にしながら用心深く、手探りをしながら進む印象をもつ。一つの例は、『ガヴァネス』

---

[1] 彼女については、最近「小説的伝記」が書かれた。彼女の人生に関して、不明な時期が散発的にあるが、18世紀の女性一般や、18世紀の女性作家の状況を踏まえて補ってあり、フィクションとして面白く読むことができる。June Jameson, *Sarah Fielding: Author of David Simple* (aSys Publishing, 2015).

[2] Mika Suzuki, “Sarah Fielding and Reading,” *The Eighteenth-Century Novel: A Scholarly Annual* 2(2002): 91-112.

（*Governess or a Little Female Academy,* 1749）で明白である。女子の学校を舞台にしたこの物語では、読書をめぐる姿勢が子どもたちの間でできていくことを描いている。第二の例は、同じく1749年に出版された『クラリッサについて』（*Remarks on Clarissa*）にみられ、リチャードソンの『クラリッサ』（*Clarissa ; or The History of a Young Lady,* 1748）について読者たちが話し合う設定になっている。それを別のかたちで発展させたのが、『クライ』（*The Cry: a New Dramatic Fable,* 1754）である。ジェイン・コリエ（Jane Collier, 1714-55）との共作とも言われ、奇抜な着想をしていることで知られる『クライ』においては、作者は人間の本性（人間の自然）を描き出す意欲をみせ、その達成のためには不自然な設定が必要であると訴える[3]。ここでは、読者を作品に描きこむのではなく、発話者を聞き手の前に立たせて、聞き手の反応も描いている。発話者が自分に関わる事情を話し、（合唱は行わないが）ギリシャ演劇のコロスのような集団が聞き手である。あるいは、まるで発話者は裁判の被告のように自分の事情を吐露し、聞き手は傍聴人、そして時折り場を制する裁判官がいるかのような設定である（ただし裁判官のような役割の「ウナ」は最終的に判決を下すわけでは

---

[3] Sarah Fielding, *The Cry: A New Dramatic Fable* (Delmar, New York: Scholar's Facsimiles & Reprints, 1986).『クライ』はセアラ・フィールディングとジェイン・コリエの共同執筆であると言われており、概して鋭敏で遠慮ない発言をすることのできるコリエの影響力が大きかったものと考えられている。Carolyn Woodwardが主張しているように、コリエが何らかのかたちで参加したと考えてもよいであろう。 (Carolyn Woodward, "Who Wrote *the Cry*?: A Fable for Our Times," *Eighteenth-Century Fiction* 9(1996): 91-7). コリエがフィールディングの相談相手・話し相手であり、影響力のある文学上のアドヴァイザーであったことは確かである。しかし、共著の外的証拠は欠如している。コリエは『クライ』出版（1754）の時期に、ソールズベリーの名士で、治安判事を経験し、文法学者でもあり政治家でもあったジェイムズ・ハリス（James Harris, 1709-80）宛てに、自分の創作についてかなり長い手紙を書いているが、彼女がとりあげているのは、『クライ』の前年に出版された『人を巧妙に困らせる方法』（*The Art of Ingeniously Tormenting*）のみである。この際の関心事は、出版物発表の時期であり、世間の話題を独占するであろうと予想されるリチャードソンの作品の出版（『サー・チャールズ・グランディソン』（*Sir Charles Grandison,* 1754）が予定されているので、その時期、つまり1754年は避けたいと記している。 (Malmesbury papers, 9M73/B54, 9M73/B59/71). その意図通り、『人を巧妙に困らせる方法』は1753年に出版された。一方『クライ』は、コリエが避けたがった年である1754年に出版された。また、『クライ』の出版者であるドズリーは、支払いをセアラ・フィールディングのみに宛てている。1753年11月19日付けの『クライ』の版権52ポンドの受領証はフィールディングのみの名が書かれている。 (Robert Dodsley, *The Correspondence of Robert Dodsley, 1733-1764,* ed. James E. Tierney (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), pp. 31, 514). ただし、コリエは1755年に亡くなっており、共同執筆者であったとしても受け取れない状況にあったということも考えられる。他に、同時代の人々が『クライ』について言及する場合、彼らが作者と考えたのはセアラ・フィールディングであった。リチャードソンも『クライ』はセアラ・フィールディングの単著であると思っている。 (FM XI, f 82, Forster Collection, National Art Library, Victoria and Albert Museum; Samuel Richardson, *Correspondence of Samuel Richardson,* ed. A. L. Barbauld (London: Phillips, 1804), II, p. 108-9).

ない)[4]。

物事が、「自然」であるか、不自然であるかの判断は、恣意的である。不自然であると評することにより、クライはポーシアの話を非難することができると信じている。ポーシアが愛情について述べると、「人間の本性である弱さから逃れているかのように、彼女の愛がまったくのプラトニックなものであると述べるのは怪しからんことで、ポーシアは純粋を装っていて非難すべきである。」[5]「彼らは、自分の胸に真の愛を微塵も経験したことがないので、そのような無私の愛は自然にはないのであると主張して、人類が彼らの味方をしてくれるよう慎ましやかに願った。」[6]『クライ』は敢えて現実に忠実な、「自然」の設定をとらない。この作品は、「劇のかたちをとることにより新たに考案された作り話」という副題をもち、事実を忠実に伝えるポーズをとった作品とは一線を画する意図をもつことが冒頭から宣言されている。この 'fable'（寓話、作り話）の自然・現実らしさと、不自然・現実からの乖離がどのように設定され、どんな効果をあげているのかを考えることがこの論文の目的である。

2）『クライ』の設定

フィールディングは、著者の使命について『クライ』の前書きで明示する。隠されているかもしれないが、ひとつの正しい何ごとかが存在し、それを探り出すことが、作者、読者、そして人生の目的であるということが信じられ、そしてそれを読まれる形で発信することが作家の義務であると彼女は考えている。作者の活躍の場である書物には、慣習・規則があるが、著者には、それを破る自由が必要であるというのが彼女の主張である。人間というものが複雑な思考、感情をもっていること、そしてそれを解き明かすのが著者の仕事であるとし、さらにはそれが非常に困難な仕事であることを指摘する。困難な仕事を行うときには、人間は工夫を必要とする。

人間の思考・気持は複雑なものであり、古来、良き著作家はそれを人々に

---

[4] この設定は、セアラ・フィールディングの周囲に法曹界に携わる人物がいたことが関係すると言われている。高等法院裁判官であった祖父（Sir Henry Gould, 1643/4-1710）、治安判事を務めた兄（Henry Fielding, 1707-54）と異母弟（Sir John Fielding, 1721-80）らの仕事に興味をもっていたという可能性である。

[5] *The Cry,* I, p. 91.

[6] *The Cry,* I, p. 106.

示すことを自らの責務としてきた。どんなに優れた著作家が筆を尽くしても、書き及ばなかった人間の心の奥の「秘密」が存在する。それを明らかにするためには、著者として工夫が必要である。その工夫は、「自由」であり、文学が守ってきている規則から外れることもあり得る[7]。

作家は規則に則って仕事をしているという前提がある。しかし、その規則は破ることもあり得る規則である。彼女がここで想定しているのは、個人の考えが表出される場についての「規則」である：

登場人物が、普通の人が他人には言わないようなことを述べると感じるかもしれないが、ここで聴衆になっているのは通常の人ではなくて、寓意的な集団であるので、それに対して胸にしまっておくようなことを伝える設定は許してもらいたい[8]。

さらに、登場人物が他の人の心の内を語ることもある。メランサの心の中が明かされる話では、ポーシアは、メランサに成り代わってメランサの経験を語る。それができるのは、行動に、心中が現れると考えられるからである。ポーシアにメランサが乗り移ったかのように話し出すわけであるが、これは特別な魔法や術のような超自然的現象によるものではないことがまず説明される。他人の心の中で起っていることを読み解くことができる個人は、普通の人間である。普通の人間ポーシアがそのようなことを行うことができるのは、人間の自然の行動原理をわきまえているために、推論する（deduce）ことが可能であり、その範囲においてわかることを述べる。そして提示の仕方には２種類が考えられ、片方が考察の提示、もう片方が演劇的提示である。前者が直接的で、後者は情報の享受者のために工夫が施された提示である。ポーシアは、メランサの役を演ずる後者を強く勧めて提案する。

メランサの行動から公平にみて推論できる限りにおいて、メランサの心をさらけ出すことにしましょう。ウナ、ただ考察を述べましょうか？あるいはメランサがここにいて、話しているような想定をすることが許されるでしょうか？後者であれば、より生き生きしたかたちで、彼女の感情をすべ

[7] *The Cry,* I, p. 14.
[8] *The Cry,* I, p. 15.

て描き出し、彼女あらゆる心の動きを行動に投下することができると思います[9]。

ポーシアは途中で、ウナに呼び掛けていることからもわかるように、話す形式を提示して、ウナの許可を求めている。これに対するウナの返事は、「私が求めるのは内容であって、提示の方法をとやかく言うのは、些末なことであり、必要のないことです。」であり、ポーシアの提案を是認する[10]。人の行動から、心の中を読み取ることができ、読み取ったものをその人になりきって表現することが可能なのである。さらに、本人でさえも認識していない事項を、ポーシアは発見、指摘することができるとまで言う[11]。

さて、この作品*The Cry*の構成を見よう。5部の構成で3巻本に収まっている。

第1巻

前書き、pp. 1-18（18pp）

第1部へのプロローグ、pp. 19-25（7pp）

第1部、pp. 27-199（173pp）；第1場～第11場；ポーシアがクライとウナの前で話す

第2部へのプロローグ、pp. 201-202（2pp）

第2部、pp. 201-282（82pp）；［場割の構成なし］ニカノー（ファーディナンドらの父親）の人生について

第2巻

第3部へのプロローグ、pp. 1-15（15pp）

第3部、pp. 17-248（232pp）；第1場～第17場；ポーシアがクライとウナの前で話す

第4部へのプロローグ、pp. 249-252（4pp）

第4部、pp. 253-339（86pp）；第1場～第5場；主にサイリンダがポーシアとクライとウナの前で主に話す

第3巻

第4部後半、pp. 1-116（116pp）（86＋116＝202pp）；第6場～第10場；主にサイリンダがポーシアとクライとウナの前で主に話す

---

[9] *The Cry,* II, pp. 143-144.
[10] *The Cry,* II, p. 144.
[11] *The Cry,* II, pp. 153-54.

第５部へのプロローグ、pp. 117-136（20pp）
第５部、pp. 137-294（158pp）；第１場〜第４場；主にポーシアが話し、終結へ
エピローグ、pp. 295-303（9pp）

５部の構成にそれぞれプロローグをつけ、最初に前書き、最後にエピローグをつけて、１部、３部、５部をポーシアに主に語らせ、２部をニカノーの物語、４部をサイリンダの物語として、第３部を要にして対称の構造を試みたようにも見えるが、それほどきれいな構造はできていない。明白にわかる通り、折角珍しい疑似演劇形式の設定を第１部で行ったのに、第２部はそれを捨てて、ナレーターを立ててニカノーの一家の過去を語っている。ニカノーは、ポーシアが恋に落ちたファーディナンド、ポーシアと親友になったコーデリア、この双子の男女の父である。ニカノーを中心に、その一家の過去の物語を、その一家の誰かがこの場に登場して語るというのではなくて、当人たちも知らないことまで知っているナレーターに語らせる。突如、語る方式を変えることは説明が必要と考えられたようで、「当事者の誰かに話してもらえるよう説得できなかったので」と説明される[12]。

第２部のみにおいて、主たる経験者であるニカノーに語らせず、ナレーターを採用することに伴い、発話者をクライやウナの前に立たせる場面を想定することも行わないことになっている。逆に、第４部で、サイリンダが登場し、自分の視点から顛末を語ることに正当化が必要であると考えられている。

> 彼女が登場しなくてはならない理由を自分で話してもらうことにしよう。もしも、私たちの方法について厳しい批評をいただくとすれば、話の明快さのために、そして物分かりの良い読者の喜びと楽しみのために、私たちの最善の判断を用いて行ったことについて、寛恕していただけるようお願いしたい[13]。

なぜ彼女本人が登場しなくてはならないのか、無理を認めながら、第２部でナレーターによる描写で読者は知っている件を、サイリンダという個人を登場させて、本人の視点から語ることになる。

---

[12] *The Cry,* I, p. 201.
[13] *The Cry,* III, p. 30.

演劇的場面設定のない第２部は、部分を構成する演劇の「場」に分けることも行っていないので、ニカノーに語らせない形をとることにより、形式にこだわったにしては非対称の構成となっている。第２部ではサイリンダに翻弄されるニカノー及びその家族の物語をナレーターが語り、第４部ではサイリンダが自分の視点から事情を説明している。その内容を考えると第２部と第４部は実は対応しており、第２部でニカノーがポーシア、クライ、ウナの前に出てきて自分の物語を語るという形をとれば、より美しい構造をつくる可能性があったが、敢えて第２部はナレーターを使っている。

３）『クライ』の目的

セアラ・フィールディングの生涯と作品について書いているリンダ・ブリー（Linda Bree）によれば、『クライ』は、心理の探求に重点がある[14]。フィールディング自身も、奇抜なことをやること自体が目的ではなく、「描きたいのは、人間の本性であることを思い出しておこう」と述べている。彼女は、行動や思考、心理を動かしている本質、あるいは、人間というものをつくっている根幹を「人間の本性」と呼び、それを描き出すのが著作家の目的であると言明している[15]。英文学の経時的発展の見地から彼女が果たした役割をみれば、「感情に関心を向けた作家であり、人間の行動の動機を鋭く見抜き、人間が互いに惹かれたり友情を抱いたりすることについての分析を得意とする」と評されている。ただし、「彼女が描く登場人物は、概して厚みがない」との評価も伴っている[16]。心理描写、感情、動機、友情の分析、これらが作品で達成されているとすれば、彼女が掲げている目標は達成されているということになるのだろう。確かに、裁判あるいは、舞台のような設定を使って、手紙以外の表現手段を使って、登場人物に自分の心情や考え方を語らせようとする斬新な作品である。ブリーはまた、「フィールディングが、形式と内容において、革新を目指して意識的にとった戦略である」。とも述べている[17]。しかし、それを実現するためだけであるならば、たとえ劇場には野次をとばす観客がつきものであるという認識に囚

---

[14] Linda Bree, *Sarah Fielding* (New York: Twayne Publishers ; London : Prentice Hall International, 1996), p. 93.

[15] *The Cry*, I, p. 15.

[16] Andrew Sanders, *The Short Oxford History of English Literature*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2000), p. 314.

[17] Bree, p. 93.

われていたとしても、クライのような歓迎すべからざる聴き手を設定しなくても良かったはずである。クライがいなくても、ポーシアは語ることができるであろうに、クライを設定した理由があるはずだ。

その理由と考えられるのは、顔のみえない塊となった集団の脅威だ。彼女より一世代前に活躍したポープ（Alexander Pope, 1688-1744）の『ダンシアッド』（*The Dunciad,* 1728）の愚物は、劣った作家が文壇で幅を利かせることへの脅威が形をとったものであった[18]。セアラ・フィールディングの想像力を支配したのは、劣った作家よりもさらに大きな影響力をもちうる劣った読者だった。ポープが描いた図式は、高尚な詩人とそれを脅かす愚物の対峙である。愚物の三文文士が、高い文化を担い得る質の高い作品を書くことのできる詩人の伝統をかき乱し、割り込んできて、世界を支配しようとしている。フィールディングの図式は、少数の作家だけでなく、より大勢の人々が関わる書物市場を含み、購買者として文学の市場に居場所を確保し、そこを翻弄しようとしている愚物読者と、発信者との間の攻防だ。目のつけどころをしては鋭く、文学的野心が感じられる。

4）クライ、不自然、現実的

『クライ』において、フィールディングは、あら捜しをしてばかりいて、気分屋で怒りっぽい「気難しい批評家」の読者と、「素直な読者」を対照させていて、「気難しい批評家」よりもさらにへそ曲がりの聴衆、「クライ」と呼ぶ集団の前にヒロインであるポーシアを立たせる[19]。作品『クライ』は、珍しい、現実にはありそうにない設定をとり、その設定が「内面」を語る工夫となっている。登場人物が自分の気持ちを語る書簡以外の方法である。

今の私たちにとっても奇妙な設定であるが、出版当時の人々も奇抜な工夫に当惑を示した。セアラ・ウエストコム（Sarah Westcomb）は、リチャードソンから『クライ』の送付を受けた。しかし、彼女の反応は戸惑いだった。彼女は、リチャードソンに、この作品についての意見を求めた。道案内なしには読めな

---

[18] George Justice, *The Manufacturers of Literature : Writing and the Literary Marketplace in Eighteenth-Century England* (Newark, DE: University of Delaware Press ; London : Associated University Presses, 2002), p. 78.

[19] *The Cry,* I, pp. 1-2; I, p. 59; Clark Lawlorは、社会改革の手段としてのグロテスクの伝統にこの作品を位置づけている。Clark Lawlor, “The grotesque, reform and sensibility in Dryden, Sarah Fielding and Jane Collier”, 187-205.

かったのである。「私が（正当な理由に基づいて）自分の判断をくだせるように、まず我が良きパパ、あなたの「クライ」についてのご意見をきかせてください。」と彼に頼んでいる[20]。リチャードソンは、この「内面」を聴衆に向かって語らせるための演劇型の構成により「作者は人間の心を知り尽くしていることを示している」が、そのような新しい工夫の達成と、その是非よりも、彼にとっては大事で気になることがあった。彼にとって、登場人物の性格設定がプロットに貢献していないことが問題だった。彼は、ポーシアの相手役のファーディナンドが物足りないと考えた。彼がヒロインの相手役として役不足であるために、プロットに説得力が欠けるという結果になっていると判断したのである。そのことをフィールディングに告げ、改版のときにはポーシアとつり合うような男性に造形しなおすことを提案した。しかし、改版が可能になるほどの売れ行きを達成しなかったので、残念ながら書き直されることはなかった[21]。リチャードソンは作品に概ね好意的であったが、世間の評判はたいしてよくなかったことを「もっと好評を得てもいい作品なんだがなあ……」と証言している[22]。ピオッチ（Hester Lynch Piozzi[Thrale], née Salusbury, 1741-81）も、もっと売れてもいい作品であるのに、と手紙に書いた[23]。

リチャードソンの文通相手の中でも際立って充実した手紙を書いていたレイディ・ブラッショー（Dorothy, Lady Bradshaigh, 1705-85）は、熱心な読書家であり、鋭い視点をもち、忌憚なく批評を述べることができる人物だった。彼女も、やはり戸惑っていたが、その当惑の原因は、手法というよりも、「クライ」と名付けられた集団の設定だった。「クライ」は、第１部第１場から登場しているが、それに先立つ第１部冒頭のプロローグで、次のように紹介されている。

> 真実と純真にたいして根深い嫌悪を抱く性分をもった大集団、また虚飾と虚偽の味方をする強い欲望をもっている集まり。……この集団に、姿を与え、全体を「クライ」と呼ぶことをお許し願いたい。なぜなら、彼らの心は不調和と不一致で満たされているのであるが、共通の敵をみつけるや、

---

[20] FM XIV ff. 133-34, Westcomb to Richardson, Aug 7 1754.

[21] FM XIV ff. 135-56, Richardson to Westcomb, Aug 9 1754 ; Richardson, II, 108-09.

[22] FM XIV ff.135-36, Richardson to Westcomb, Aug 9 1754.

[23] Hester Lynch Piozzi, *The Piozzi Letters : Correspondence of Hester Lynch Piozzi, 1784-1821 (Formerly Mrs. Thrale)*, ed. Edward A. Bloom and Lillian D. Bloom (Newark: University of Delaware Press ; London : Associated University Presses, 1991), II, p. 249.

概して彼らは意見の一致した一団となるのであるから[24]。

ブラッドショーは、そんな「クライ」の重要性に気づいていた。ただし、彼女の読み方は、フィールディングが意図した読み方に反したものだった。ねじくれた根性をもつ聴衆「クライ」にすっかり影響されてしまい、彼女は、自分自身が底意地の悪い批評家になってしまいそうな気がして、「残念なことに、憎々しい「クライ」のなかに何度か自分の姿を見てしまいました。」と言っている[25]。これは、作者が処方して示している読み方にはまったく即さない。しかし、非常に大事な点を認識させてくれる。聴き手を描きこむことで、描かれていることを自分の問題としてとらえることを促す仕組みが図らずもできているということがそのひとつである。セアラ・フィールディングは、この集団がいる空間を、「空想の翼に乗って舞い上がったところにある」「想像力によって創り上げられた巨大な途方もない城」とした[26]。今の私たちは、情報の途方もない集積保存及び情報システムの場、クラウドを連想してしまうが、フィールディングの想定では、現実とは切り離された別世界である。それとは対照的に、ブラッドショーにとっては、日常の自分が見いだせる場、つまり現実と変わりない場である。彼女にとって「クライ」は想像力が形成した「作り物」ではなく、自分もその一部である、現実の人間社会の「自然」の姿である。

また、文句ばかり言う、「クライ」の群衆の中に自分を見出すという彼女の自己認識に注目しよう。「クライ」を前にして、経験してきたことを、そして心の内を語るという設定は、考えようによっては、現実にはありそうもない設定とは言えないともみえてくる。人の話を聞いて、難癖をつけたがる個別の個性や顔をもたない一群の大衆は、ブラッドショーが言うように、自分と同じ一面をもっているのである。一般大衆、群衆、民衆、一群の人々、マスが、発言権をもち、他からの規制と自己を律する認識から自由で、その時その時に感情に任せて心情を吐露することができる世界を、私たちは日常的に知っているような気がしてくる。

かえって、現実にはありそうにないのは、「クライ」の対極にある存在であり、絶対的な真理を標榜する「ウナ」である。「力強い純然たる真理」は「想像力が描いた麗しき幻影」なのであるが、それに人の姿を与えたものが「ウナ」であ

---

[24] *The Cry,* I, p. 20.
[25] FM XI f.94, Lady Bradshaigh to Richardson, March 16 1754.
[26] *The Cry,* I, p. 19.

る[27]。「クライ」と違って「ウナ」は、静かである。たいていは黙ってポーシアらの話を聞いている。いつもポーシアの意図を善意をもって解釈する。それが本来のとらえ方であるべきだが、世の中にはそんな奇特な人はなかなかいないという認識なのか、ウナはクライと同じように抽象的な存在として設定されている。ポーシアが、「クライ」の野次と喧騒に困ったとき、「ウナは、目配せをしてポーシアに是認を与え、ポーシアにはそのことがよくわかっていた。」[28]「ウナ」は、揺るがない真理として、発話者及び作者の意図を支持し、安心感を与えてくれる。

ポーシアとウナは、理想的な聴き手としての役割を担うのであるが、この聴き手たちは、主に、目で話への反応を示し、しばしば微笑みで反応する。また、サイリンダの話していることが、道徳的に受け入れられないと考えるときには、ため息のみで反応する。特に、ポーシアが、サイリンダはニカノーを悩ませたファム・ファタールではないかと疑い始めたときにも、話の邪魔をしないようにという配慮からか、あまりにも反応が抑えられていて、不自然に感ずるほどだ。また、ポーシアとサイリンダは、ニカノー一家を介したつながりだけでなく、直接に過去に知り合っていて、互いに知性を尊敬しあっていた仲間であったことがわかったときにも、ため息と涙のみが交わされる[29]。承服しがたい、あり得ないような、あるいは不自然な感情の抑え方、発言の控え方である。話し手と聴き手、作者と読者の関係を並置していいとしたら、この聴き手のあまりに控え目な反応は、作品の受け手として、読者は、積極的に作品を作っていくのに参加するという考え方と齟齬があるようにも思える。けれども、セアラ・フィールディングが『ガヴァネス』で述べていた読書の本来の目的ということを思い起こせば、齟齬と思われたものを解決することができる。読んだものが読者の実生活にとりこまれていくことが作者と読者の共同作業なのであって、その共同作業には時差があって良いのだ。ポーシアは、サイリンダの話を意見をさしはさむことなくそのままに受け入れて、ポーシア自身の人生を作っていく（同じように才能と知識に恵まれながら、道を一度は誤ったサイリンダの教訓を活かして）ことで、その並置は達成されるようにできている。ただ、物語が進行している間は、聴き手はただただ物語を受け入れるのを良しとしていることになる。

---

[27] *The Cry,* I, pp. 21-22.
[28] *The Cry,* I, p. 61.
[29] *The Cry,* III, p. 18.

5）自然

セアラ・フィールディングの小説作品第一作『デイヴィッド・シンプル』（*The Adventures of David Simple,* 1744）においては、登場人物描写の方法は、かなり単純である[30]。人物としての造型の出来は別にして、人物描写で使われる語彙があまり多くなく、人物がきっぱりと二分される傾向がある。生来良き性格（good-nature）をもった人と、悪しき性格（ill-nature）をもった人という記述への依存が強く、単純な色分けで、人物の心理の複雑性、明暗の濃淡や描写のバラエティーに欠ける傾向があるのだ。人間関係の作られ方や事態の進展を動かすもの、画策や虚言を用いて人を陥れる行為の動機、詐欺の被害にあう理由、困っている人を助け、困難に直面している人の味方になる動機、事件を起こした人物の動機、このような行為の原動力となるものが、当事者の生来良き性格または悪い性格のためにそうなったのだと説明されて、読者はそうか、と納得するしかない場合が多々みられる。

たとえば、「そこで、生来の性格の良い叔父はジョンを別室に連れて行き、詳細に問いただした。」[31]デイヴィッドは、弟ダニエルの遺言書偽造による遺産奪取の手にはまって、叔父に身を寄せていた。デイヴィッドにとって人間がもつ悪徳は、未知だったので、彼はダニエルに対して何の疑いももっていなかった。しかし、そのダニエルが実は貪欲で邪悪な人間だったのであるから、叔父だってどんな人かわからない。けれどもここで、「生来の性格の良い」人であると叔父を描写してしまって、このたった一言で、叔父は善良な人間で、デイヴィッドにとって味方であるということを伝え、読者はもう叔父について知るべきことは知ってしまっている。

イザベルが語る長い話のなかでは、弟のスタンヴィル侯爵と「生来の性格の良いデュモン」の間の友情が語られる[32]。学生時代からの友人である二人は、「偽

---

[30] ただし、登場人物の他の人物に関する見解が狭量であることをナレーターが厳しく評価しているのが描かれていると読むことができるとジェノヴェーゼは述べている。Michael Genovese, "'A Mixture of Bad in All': The Character of Self-Interest in Sarah Fielding's David Simple," in *The Age of Johnson,* ed. Jack Lynch (New York: AMS Press, 2012), 207-231.

[31] Sarah Fielding, *The Adventures of David Simple : Containing an Account of His Travels through the Cities of London and Westminster, in the Search of a Real Friend ; and, the Adventures of David Simple, Volume the Last : In Which His History Is Concluded,* ed. Peter Sabor (Lexington: University Press of Kentucky, 1998), p. 18.

[32] *David Simple,* p. 163.

りのない忠実な友情」で結ばれている[33]。しかし、デュモンは、良くない意図や歓迎できない情熱をもった人の関心のターゲットとなり、しばしば不運に見舞われる。声の似ている別人に間違われたりするのであるが、後に彼に起ることに較べれば、小さな障害だった。イザベルとデュモンは互いに惹かれるようになり、結婚する予定である。スタンヴィル侯爵の妻ドリメーヌの体調がよくないとき、「デュモンは、スタンヴィル侯爵への友情も相まって、生来の良き性格を発揮し、彼女に楽しみを与えるように必死で努めた。」[34]デュモンの生来の良き性格は、親友の妻がふさぎこんでいるのを看過できない。「生来の良き性格をもったデュモンは、彼女が言葉にできないほどの大きな苦しみと戦っているのだと思い、それを取り除くのを喜んで行うので、それができるように彼に苦しみを教えてほしいと懇願した。」[35]良き性格をもったデュモンに他意はなく、彼がドリメーヌに思いやりを示すのは、彼のスタンヴィルとの間の友情の一部である。二組のカップルが４人の仲の良いグループをつくり、幸福な日々が訪れるはずだった。スタンヴィル侯爵の溺愛の対象である妻ドリメーヌが、デュモンに思いを寄せなければ、である。妻との仲を疑ったスタンヴィルが、嫉妬にかられ、結局は、親友であり妹の恋人であるデュモンを殺害するという悲劇が起こり、その顛末を、デュモンを失ったイザベルがデイヴィッドたちに語るという設定になっている。デュモンについて当初から「生来の良き性格」で説明してしまうので、よく似た声事件のとき（そもそも、デュモンによく似た声をもった人がしゃべるのだと当初から種明かしされてもいる）には、デュモンは潔白に違いないと読者は確信している。ドリメーヌへの思いやりを示す場面では、デュモンの良き性格が彼の行動を導いているだけであり、デュモンに、親友の妻に対する複雑な心情がある可能性は最初から排除されている。このように、「生来の良き性格」は、人物の行動と動機を明確にして、わかりやすくするが、人物をまったくの潔白にし、また、それ以上の描写を必要としない人物を形成してしまう。物事の経緯や世間の不条理にしても、それが人間世界の「自然の成り行き」として片づけられる。

『クライ』で使われる「生来の良き性格」と「生来の悪い性格」は、こんなに単純ではない。クライは、「ポーシアの生来の悪い性格を嫌悪していると表明

---

[33] *David Simple,* p. 170.
[34] *David Simple,* pp. 179-180.
[35] *David Simple,* p. 183.

し」、「自分たちの思いやりと生来の良き性格」を称える[36]。また、ここで描かれるニカノーやサイリンダは、かなりの人間的な複雑性をもっている。サイリンダは、ポーシアの恋人の父ニカノーを経済的破滅に追い込んだ女である。サイリンダが目の前で話し始めたときには、ポーシアはそのことに気付かない。また、それとは別に、実はサイリンダに、ポーシアは会っていて、強い印象を受けていた。ポーシアが12歳のころに、まばゆいような知性と深い学識で彼女を魅了した女性がいて、それがサイリンダだった。サイリンダの話の途中で、このことが認識される。ポーシアの母親が、サイリンダの奔放な道徳観に気づき、12歳の女の子をその影響下におくことを危惧し、引き離したという事情があったのであるが、ポーシアはそのことを知らずにいた[37]。

これまで、セアラ・フィールディングの物語の中で、人生の物語を明かす人は、まったくの悪意や策略の塊か、まったくの善人ばかりだった。白黒が非常にはっきりしていたのだ。過去に過ちを犯した人が語ることもある。ただし、過去の行動を悔やみ、悔悛を経てから語るのが普通である。サイリンダは、ポーシアたちを聞き手とした話の最終局面に至る前は、自らの自分本位な行動を、哲学的、知的に正当化し、他人に迷惑をかけようが、自分のせいで他人が不幸に陥ろうが、意に介さない女である。サイリンダの話を聞いているポーシアは、サイリンダの見地がわかって失望する。

> 放縦な想像力が拘束されずに彷徨う様をサイリンダが描写する様子をみて、既にその影響力から解き放たれて、過去の過ちとして考えることができるようにと、真に親切で善意に満ちた心が強く望んでいた。しかし、ポーシアは今のところ、その喜ばしい希望を失い、自分の前に立っているのが、最高に明晰な頭脳と、最も活発な理解力に恵まれながら、虚栄心と自尊心に導かれて、最悪の幻惑に浸っているという嘆かわしい状況にある人なのではないかと疑っていた[38]。

サイリンダの語り及びこの作品が集結する第５部のプロローグでは、登場人物の性格についての考え方が披瀝される。人間の「真実で自然な描出」を提供することを目的とし、

---

[36] 例えば、*The Cry,* III, p. 165.
[37] *The Cry,* III, pp. 18, 105.
[38] *The Cry,* III, p. 12.

詩人と哲学者は、経験と自然に関する観察から登場人物の像を形成するというのは疑いのないことである。詩人の中でも最も天才的な詩人、哲学者のなかでも最も洞察力のある哲学者によると、人間の心の主たる傾向は、その人物の人格的特徴と言われるものであり、その人のすべての行動に必然的に影響するものであるが、それは、まったくの善であるか、あるいは悪であるかであるという意見であると推論して公正であると信じている[39]。

「人間の心の主たる傾向は、……まったくの善であるか、あるいは悪である」というのであるから、『デイヴィッド・シンプル』での見解と似ているのであるが、主たる、第１の傾向ということであるので、それ以外の性向もあり、また、次のように個人の選択も重要な要素になっていることが述べられている。

ある人がまったく悪いとか、完璧に善であるとか主張することは馬鹿げているであろうが、あらゆる理性をもった個人が、絶対的に善への道、あるいは堕落に続く道にいるということを宣言することはまったく馬鹿げたことではない[40]。

人間の行動は、熟考の結果選択されたものであるということだ。そして、サイリンダの場合、その熟考が鋭い知性をもって行われたが、判断に欠陥があり、堕落の道を選んできてしまったと解釈されている。「間違いの連続の人生を歩んできたサイリンダは、好みが不品行であったり、邪悪な心をもっていたのではなく、自己完結的哲学上の自尊心と、自分が独立した存在であると空想して陶酔して、活発な想像力で勝ち誇って」いたが、愚かな選択をしていたことを認識し、ポーシアに受け入れてもらって、新たな生活を始めた[41]。サイリンダは、知的で魅力的な人物であり、かつ哲学的裏付けをもって通常の道徳からはずれた行動をするという点で、ポーシアやウナが眉を顰める微妙な人物である。

６）最後に

『クライ』の試みは、さまざまなジャンルの複合であり、法廷での陳述、ギリ

---

[39] *The Cry,* III, pp. 119, 135.
[40] *The Cry,* III, pp. 127-128.
[41] *The Cry,* III, p. 301.

シャ演劇、エッセイ、人生の物語、小説、ロマンス、庶民の人生物語、返答を伴う発話などを含む。返答込みのエッセイ、物語つきの論文でもあり、小説の可能性の枠を引き延ばして拡大するものであった。ブリーは、「『トリストラム・シャンディ（1759-67）以前に、『クライ』ほど徹底的に、そしてあからさまに、言葉と現実の間の騒然とした緊張関係を探究しようとした小説は他にない」と述べている[42]。クライによる発言者の言葉の曲解をみると、社会では言葉が濫用されて、言葉は危機にあるという認識が強く働いていることがうかがえる。それを描き出している一方で、言葉と現実の関係、正しい関係には、答えがあると考え、それに即して静かに言語を統制しようとしている点では、セアラ・フィールディングの立場は、エリート主義なのかもしれない。

彼女は、18世紀の書物市場が進もうとしていた先にある世界を支配する力や、とらえどころのない無定形の、数の力や妨害音の大きさで他を圧するマスメディアや民衆を想定した。話し手を悩ませる聴き手、作家に脅威を与える愚鈍な読み手、とらえどころなく、無知蒙昧で愚かで図々しく、集団の圧力で市場、あるいは世の中を動かしていく衆愚の脅威を指摘していると読むこともできる。衆愚への対処は、ポーシアによって、物語を語ることであり、論ずることであることが示される一方で、ウナような絶対的権威で黙らせ、あるいは目的を失わせて雲散霧消させることでもある。最終的に、人生の物語は、たとえクライのような愚鈍な聴き手に対してであっても、発されなくてはならないし、共有されなくてはならないという強い信念を表している。良き聴き手、読者は発される物語をまるまる受け入れて、そして自分の物語を紡ぐ。その発想は、物語の生産を永続させることになるが、本として売れ行きを伸ばすのに貢献することはなかった。『クライ』以降は、挑戦や実験よりも、洗練の必要を感じて、手法を改変していったのかもしれない。彼女の人間の「自然」「本性」を描く目的は継続していくが、工夫に富んだ一見不自然にみえる自然の道具立てを使わなくなった。売れ行き（読者の反応）を真摯に受け止めて、対処する方法の手探りを進めたのか、あるいは気概を失ったのか、この後彼女は、『クライ』でとったような、人間の本性・自然を描くための工夫としての「不自然な」手法はとらない選択をする。しかも、『デルウィン』では、もしかしたら、『クライ』の「不自然」な設定を多少悔やんで、作者の意図を伝えることをより丁寧に行っているのかもしれない。『デルウィン』前書きでは、読者への配慮が重視され、ま

[42] Bree, p. 100.

た、「自然が指し示すものを描いたものであるのか、それとも詩人の頭の中だけにある突拍子もない空想か、を判断するのは読者である」とし、詩人が行うべきは、「自然の模倣である」と主張する[43]。

Bree, Linda. *Sarah Fielding.* New York: Twayne Publishers ; London : Prentice Hall International, 1996.

Dodsley, Robert. *The Correspondence of Robert Dodsley, 1733-1764.* edited by James E. Tierney Cambridge: Cambridge University Press, 1988.

Fielding, Sarah. *The Adventures of David Simple : Containing an Account of His Travels through the Cities of London and Westminster, in the Search of a Real Friend ; and, the Adventures of David Simple, Volume the Last : In Which His History Is Concluded.* edited by Peter Sabor Lexington: University Press of Kentucky, 1998. 1744, 1753.

———. *The Countess of Dellwyn. By the Author of David Simple [S. F.].* London: for A. Millar, 1759.

———. *The Cry: A New Dramatic Fable.* Delmar, New York: Scholar's Facsimiles & Reprints, 1986. 1754.

Genovese, Michael. "'A Mixture of Bad in All': The Character of Self-Interest in Sarah Fielding's David Simple." In *The Age of Johnson*, edited by Jack Lynch. 207-31. New York: AMS Press, 2012.

Johnson, Christopher. "Epic Made Novel: Appropriation and Allusion in Sarah Fielding's History of the Countess of Dellwyn.". In *In the Age of Johnson : A Scholarly Annual*, edited by Jack Lynch. 233-54. New York: AMS Press, 2012.

Justice, George. *The Manufacturers of Literature : Writing and the Literary Marketplace in Eighteenth-Century England.* Newark, DE: University of Delaware Press ; London : Associated University Presses, 2002.

Piozzi, Hester Lynch. *The Piozzi Letters : Correspondence of Hester Lynch Piozzi, 1784-1821 (Formerly Mrs. Thrale).* edited by Edward A. Bloom and Lillian

[43] Sarah Fielding, *The Countess of Dellwyn. By the Author of David Simple [S. F.]* (London: for A. Millar, 1759), xv-xvi. この作品での、文学作品を踏まえた読者との関係のつくりかたについては、Christopher Johnson, "Epic Made Novel: Appropriation and Allusion in Sarah Fielding's History of the Countess of Dellwyn.," in *In the Age of Johnson : A Scholarly Annual*, ed. Jack Lynch (New York: AMS Press, 2012), 233-254. など参照。

D. Bloom Newark: University of Delaware Press ; London : Associated University Presses, 1991.

Richardson, Samuel. *Correspondence of Samuel Richardson.* edited by A. L. Barbauld London: Phillips, 1804.

Sanders, Andrew. *The Short Oxford History of English Literature.* 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 2000.

Suzuki, Mika. "Sarah Fielding and Reading." *The Eighteenth-Century Novel: A Scholarly Annual* 2 (2002): 91-112.

———. "The "Words I in Fancy Say for You": Sarah Fielding's Letters and Epistolary Method." *The Yearbook of English Studies* 28 (1998): 196-211.

Woodward, Carolyn. "Who Wrote *the Cry?*: A Fable for Our Times." *Eighteenth-Century Fiction* 9 (1996): 91-7.